AACK 京都大学学士山岳会 No.71

Newsletter

November 2014

http://www.aack.or.jp

目　次

ガネッシュのあとに
吉野熙道……1

回想 50 年
木村雅昭……6

ガネッシュからヤルン・カンまで、わたしの二十代
上田　豊……8

1964 年京都大学山岳部ネパールヒマラヤ遠征隊　雑感
上尾庄一郎……12

ガネッシュ讃
斎藤清明……15

アンナプルナ南峰について
編集人　横山宏太郎……16

第 30 回雲南懇話会(2014 年 8 月 16 日開催)、その講演概要
安仁屋政武、前田栄三……16

会員動向……18

編集後記……18

ガネッシュのあとに

吉野　熙道

1964 年 10 月 13 日、私は木村、上田と共にガネッシュの頂上にいた。南にはインドに続くネパールの山と谷が広がり、ふり返れば茫漠としたチベット高原があった。頂上は平べったい雪面で、左右には尾根が長くのびて、その端はそれぞれゆるやかな高みとなっていた。苦労して登ってきた東面は急峻な斜面が深く切れ落ち、南側ものぞきこめないほどの深みであった。

一連なりの尾根の上に 3 つのピークがあり、私たちはその中央に立っていた。南から北へ、順にわずかずつ低くなっていた。中央の峰からは東よりに弓なりの尾根が下り、やがて盛り上がってヒウンチュリの峰となる。ポカラから見ると、この連なりが、あたかも象が両耳をひろげ鼻をのばしているように見えるのだ。人々がこれを象の顔をした神になぞらえてガネッシュと名づけたのは、ごく自然であったろう。このガネッシュ峰の 3 つの峰からさらに北へとのびた尾根の先に、アンナプルナ 1 峰があり、そこから右にアンナプルナの 3 峰、4 峰、2 峰が空を限っている。3 峰から南にのびた尾根の先端がピンとはね上り、マチャプチャリ（魚の尾）の峻峰となっている。ガネッシュ、アンナプルナ 1 峰、3 峰、マチャプチャリにぐるりと囲まれて、アンナプルナ内院の広い谷がうずくまっている。

翌々日には上尾、ミンマ・ツェリンが南の峰に登り、樋口、カルマ・シェルパが北の峰の途中まで登った。さらに島田と木村はテント・ピークに登った。

私たちのガネッシュ初登頂は終った。

枯草の目立ちはじめたベース・キャンプをあとにした。ポカラに帰ってホテルの庭でビールをのみながら、北一面に広がったアンナプルナ連山の白い壁をながめて、あそこを登ったのだ、と無上の満足感にひたった。

カトマンズに帰り、樋口、上尾は帰国したが、現役 4 人は 2 組に分かれて、それぞれシェルパ 1 人だけを連れたヒマラヤ貧乏旅行を楽しんだ。初登頂とは異なった意義深い旅だった。

この間東京で行われていたオリンピックは、私達にとっては遠い異国のできごとでしかな

かった。帰国して東京から乗った新幹線が、私達がいかに現実離れした世界に生きていたかを思い知らせるものだった。

やがて卒業、就職。私は神戸で製薬会社の営業マンとなった。それは一応将来の安定した生活を保証するものだった。それまで知らなかった刺激的な世界もそれなりにおもしろいものだった。休暇はすべてきままな山行に費やした。

だがこの間になんとはない不満が私の中にどんよりとたまっていった。医薬品業界と医師との金がからんだ関係が、世間でいわれている以上に汚いことを知ったせいもあった。私の中には、ヒマラヤで農業の仕事をやりたいという気持が強くなっていった。

当時秘境と呼ばれたブータン王国は中尾佐助氏によって紹介されていた。また氏の努力によって、西岡京治さんという人が国連コロンボ・プランの要員として、農業指導をしていることは知っていた。私は農学部出身といっても、農業の実地経験などはまったくなかったが、植物を扱うのは根っから好きだから、なんとかやれる自信はあった。

この頃、ヒマラヤの未踏峰は数えるほどになっていた。しかしブータンでは英国隊がチョモラーリを登ったのみで、未踏峰の宝庫であった。AACK はカンチェンジュンガ西峰をねらっていたが、登山許可は下りなかった。現地人の宗教的対象であるのがその理由とされていた。ブータンも同じ理由で登山は許可しないだろうと思われた。だが真の理由は、イギリスに代ってヒマラヤの宗主国でありたいインドの反対によると思われた。インドはブータンを中国に対する前進基地にしておきたいので、ブータンの外交と軍事の実権を手放そうとしないのが本音だろう。

AACK 内でブータン遠征は検討されていたが、登山を主とするのでなく、ブータン特有の文化と伝統がこわされることなく近代化していけるように協力したいという考え方が工学部の松尾稔助教授を中心に強くなっていった。私自身はもちろん大賛成で、はじめから残留要員として隊員に名乗りをあげた。

われわれはブータン研究会という組織をつくり、松尾助教授を中心に西岡氏とも連絡をとっていた。ブータンの王妃様は日本びいきで、しばしば来日しておられるとのことだった。外務省筋などからも情報を集め、とうとう桑原武夫、中尾佐助、松尾稔の 3 氏が京都で王妃様を接待するところまでこぎつけた。王妃様はわれわれのブータン訪問の目的を快く理解され、インビテーション・レターを送ると約束して下さり、やがてそれは届いた。

桑原教授を総隊長、松尾助教授を隊長に、総勢 8 人の隊が成立した。副隊長の吉野は西岡氏のパロ農場でのボランティア、学生の山本清司は子供達に数学を教える、との目的での残留要員となった。

吉野は可能ならば永住を覚悟していたので、入国後に簡単によび寄せることができるようにと、かねてからつきあっていた女性と 5 月に結婚した。2 ヶ月後にはしばらくのお別れとなる新婚生活がはじまった。

1969 年 9 月末、まず王妃様のゲストとして桑原、笹谷哲也が 1 週間入国した。松尾以下 6 人も彼等に続いて入国できた。ここで必要な許可というのは、ブータンの許可なのではなく、インドからブータンに入るインド側のインナーライン・パーミットというもので、インドとしては中国に対する最前線となるブータンに外国人を入れたくないのである。当時はインド経由でないとブータンに入れないのだった。イギリス統治を引き継いだインドは、ブータンに対しては宗主国の如く、その軍事と外交に関しては指導する権利を有していると主張していたのだ。ブータンは当時やっと国連に加盟できたのだが、インドの態度は変っていなかったのだ。

パロでは王妃様の特別のおはからいで何不自由なく過せた。1 日ジープでティンプーに行き、王様にごあいさつした。現代社会では稀な、封建的な旧体制ときびしい身分制社会とが近代化圧力と相克しつつある、生々しい現実を見る毎日だった。このような状況の中で、西岡氏は細々とした点にまで丁寧な助言と忠告を与えてくれた。その言葉の隅々に、彼がたった 1 人でこれまで、いかに苦労してきたかがにじみ出ていた。氏は今すべてのブータン人の尊敬を集めている。西岡農場と周辺の農民の生産する蔬菜類は今や、ブータン人の食生活に大きな変容をもたらしたばかりでなく、インドにまで輸出されているのだ。

11 月 14 日、いよいよタシガンまでの徒歩での東西横断旅行に出発した。東に行けば民族も

言葉も変るそうだ。西ブータンの人間はふつう東には行きたがらないそうだ。実際その通りであって、連絡将校として同行したリンジ大尉は標準語のゾンカが通じる地元の役人の助けを借りねばならない場面も多かった。

次々と眼前に展開する新規な風物に思う存分好奇心を満足させつつ、イネとムギ類を中心に作物の種子を採集しつつ、1ヶ月近い横断旅行を終えた。タシガンからはインド領に出て、1日ジープをとばして、最初入国した時と同様ジャイガオンからブータンのプンツォリンに再入国した。

道々リンジ大尉は「東ブータンの女は美人ぞろいでいい嫁さんになるから、自分はタシガンに着いたら結婚する」と楽しみにしていたが、我々は冗談だと思っていた。ところがタシガンに着いた翌日、彼は「結婚式に出てくれ」と言ってきた。言葉もろくに通じないのに、どうやって口説いたのだろう？祝いの席では彼はしきりに花嫁に話しかけていたが、彼女は我々を意識したのか、下を向くばかりだった。入国以来我々は、大尉の伊達男ぶりは十分に承知していたが、これにはさすがに驚いた。なおたしかに、東ブータンの女はうりざね顔で目がきりりと大きくつり気味の美人顔が多かった。

やがて松尾以下の本隊は帰国し、私と4回生の山本清司は居残った。ところが例年のことなのだが、王族や官僚達が避寒のため欧米などに出かけてしまうと、インドの高等弁務官サイドから、「なぜ彼等は滞在し続けているのか？早く追い出せ」という圧力が強まってきた。西岡氏と相談しても手の打ちようがなく、ついに帰国せざるをえなくなった。

帰国後将来の展望もないままに妻の実家に居候して職探しをしていたある日、京大の研究室から「木原先生が三島の研究所の助手として、若い人を探している」という話が伝わってきた。ちょうど三島でコムギのシンポジュームが開催されるというので、私は京大遺伝学研究室の末本先生にお願いして、シンポ会場で木原先生にひきあわせていただいた。先生はすぐさま、「いいよ、来たまえ」とおっしゃったので、私のほうがまごついてしまった。

折からコムギの交配シーズンに入っていたので、私はすぐに木原生物学研究所の三島分室で、昼は交配、夜は染色体観察の仕事にとりかかった。3、4時間の睡眠しかとれない忙しさだったが、これほど充実した日々を過ごしたことはなかった。同時に国立遺伝学研究所の特別研究員となり、阪本寧男先生の指導も受けた。木原先生の横浜のご自宅にある文献・図書の整理も私の仕事であった。

しかし研究所は木原先生個人の資金をベースとした財団法人で経営的に苦しく、やがては閉鎖されるのは目に見えていた。私はアメリカかカナダに留学して学位を取るべく自分なりに準備をしていた。しかし数人の先輩に相談すると、「数年かけて学位が取れたとしても結局は職探しをせんならんし、しかもそれは容易なことではない。よく考えて」とのことだった。もっともなのでしばらく様子を見ることにした。やがて岡山大学農学部の教授である研究所の先輩から、助手として来てほしいとの勧誘があった。願ってもないことなので、喜んで岡山に移った。

助手としての仕事をする以外に、私は自分なりにサトイモの研究を続けていた。実は木原先生は植物の左右性をも研究テーマの一つとしていた。たとえば植物の葉やツルが左右どちらに巻くか、などである。しかし実験するのが難しく、現象論にのみ終ってしまうので、古くから多くの学者がとり上げながら、ほとんど進展のない研究分野であった。これに興味をもったりするのは邪道であると見られていた。サトイモにもいくつかの左右性があって、おもしろいので自分なりにいろいろな系統や近縁植物を調べていた。サトイモ科植物は大変大きな植物群であるが、栄養体繁殖をするものが多く、染色体倍数性や自家不和合性もあるため、交配実験による遺伝的研究は行われていなかった。

その頃京大農学部遺伝学研究室では常脇恒一郎教授のグループが、葉緑体DNAの多様性を用いた植物の系統進化を研究していた。一方、私は教授との折り合いが徐々に悪くなっていた。自分なりに一生懸命やってはいるのだが、どうも人間的に合わない、としか言いようのないほどになり、私はさっぱりと教授の手伝いはやめて、学生実験の指導以外はサトイモの収集と調査を続けていた。野生種を集めて交配実験をするべく、南西諸島、東南アジア、ヒマラヤでの調査や系統収集も行っていた。ヤルン・カン遠征中には、イネ・ムギ類の他、意識的にサトイモ類をたくさん採集していた。ヒマラヤ

周辺はサトイモの原産地と考えられていたが、はっきりした証拠があるわけではなかったし、サトイモの遺伝的研究など無に等しく、やりがいがあると思っていたのだ。

この間、時々岩魚釣をする以外は、山らしい山にはほとんど行かなかった。私は専ら外洋ヨットレースにのめりこんでいた。以前から山を登りつつも、いつかはヨットをやりたいと思っていたのだ。岡山に移ったのを機に、大型クルーザーのクルーにもぐりこみ、レースに参加しては腕をみがいていた。小型船舶操縦の1級免許も取っていた。いつも地面と足がくっついている山とちがって、ヨットは人間の知識・技術と体力・能力をフルに使って地球そのものにとり組む世界であった。山よりはるかに複雑でむずかしいといえる。欧米の登山家には、外洋でのレースやクルージングを楽しむ人も多い。私も沖縄やナホトカへのレースやクルージングを楽しんでいた。

ある時ヨット仲間の1人が、「太平洋シングルハンド・レースに出たい」と言っている友人がいる、と教えてくれた。興味を持ってその男、今田福成君に会ってみた。彼なりの決意や作戦、操船技術を確かめたところ、「こいつならやれそうだ」との確信を持つようになった。彼は西宮のハーバーを根城に、ヨットの整備をしたり、クルージングの下働きをしている、いわゆる「ヨット乞食」の一人であったが、その能力と人間性には信頼が持てた。私はスポンサー探しと他のすべてのマネージメントを引き受けることにした。彼は作艇を含むさまざまなヨット関係の友人を持っていたし、何よりも、金持ちのヨット・オーナーにこきつかわれる、いわゆる「ヨット乞食」から這い上がろうというガッツを持っていた。彼の友人のヨット・デザイナーが太平洋横断用に新たに設計した図面を引っ下げて、スポンサー探しに着手した。カーボンとケブラーという繊維で、世界で初めての軽く堅い艇体を作って、太平洋の気象と海象を分析してシミュレーションを行ない最適のコースを割り出す計画も作った。しかし何といっても夢のような話でまじめに話を聞いてくれる人も少なかった。

元来私は山岳部内でも鼻っ柱の強い方であったが、この時ばかりはかなり無茶な話であることはわかっていた。ヨットを作ってレースを終えるまで、3000万円位かかると思われた。ヤルン・カン遠征に匹敵する大事業なのだ。

まずは総隊長が必要だ。西堀栄三郎先生にたのみに行った。ところが、「今わしは、植村直己君の極地計画を手伝っているので、どもならん」と断られた。

そもそもわれわれの計画の独創性は次の点にあった。即ち、

(1) 軽量で堅いカーボンとケブラー繊維の艇体を作る。これまで何度も試みられてはいたが、成功した例はなかった。

(2) 太平洋の気象・海象のデータを集めて、最適の横断コースをシミュレーションする。

というものであった。

(1) については知り合いの四日市の造船所に依頼し、(2) については、AACKの先輩・平井一正教授の神戸大の研究室で、修士論文のテーマとしてもらうことにした。驚いたことに、太平洋に関するまとまったデータはほとんどなく、方々からかき集めてこなければならなかった。

スポンサー候補としては、太陽工業というテント屋さんを考えた。テント屋さんから始めて、朝鮮戦争時の積極的な経営を通じて大きくなった、知る人ぞ知る企業で、大阪万博の設営も手がけたという。

今田は「地のままの自分を見てもらう」と言って、ジーパンとTシャツのヨット姿で行こうとしたので、叱りつけてスーツに着がえさせた。

大阪本社で総務部長さんにお会いして計画の説明をした。数日後、断りの連絡がきた。至極もっともである。ヨット乞食の言う方が図々しいのである。

ところが、ところが！数日後、「会長が話を聞きたいので、東京に来て下さい」との連絡があった。

数日後、東京で能村龍太郎会長にお会いした。会長は温厚な笑顔で我々の話を聞いてくれたが、ヨットや海のことは素人のはずなのに、要所々々で適切で厳しい質問をしてくるのには、さすが！と驚いた。こちらの説明にも一段と力が加わった。1時間ほどで大方の説明は終った。会長はいきなり、「わかりました。3000万出しましょう」と言った。一瞬呆気にとられ、その言葉の意味がわからないほどだった。

今田の同級生が勤めている四日市の造船所

で、大車輪のヨット製作がはじまった。

当初はマスコミ関係のスポンサーを探すことも考えたが、やがて考えを変えていた。資金援助の代償に不本意な要求に屈する羽目になることは避けたかった。少し前までNHKのニュースセンター9時のキャスターであった小浜維人氏に話をしたところ、氏はすぐにNHKの番組企画にとりあげてくれ、記者とカメラマンの専属チームがつけられた。おかげですでに建造にかかっていたヨットの姿も進水式もすべて放映されることになった。

追風の時に引き上げて水の抵抗を減らせる可動キールと平べったい艇体断面、長いマスト、大きなセール。何よりも軽いカーボンとケブラー繊維の艇体のヨットが完成し、「太陽」と命名された。計算上では文句なく優勝するはずのヨットであった。この噂が広まったせいか、出場するといわれていたヤマハヨットは出場をとりやめた。

サンフランシスコのスタートから毎日、各艇の推定位置がテレビに流れた。

「太陽」は38日間という文句なしの世界最短記録で完全優勝した。無名のヨット青年はこれによって名が残り、一生食いっぱぐれのない栄誉を得たわけで、私にとっても痛快この上ない勝利だった。

私のヨットは一段落したので、私はすぐネパールに向かった。私の本来の仕事、サトイモの調査と採集のため、シェルパとポーター1名ずつを連れてのヒマラヤ気まま旅であった。

実は、しばらく前から私と教授との関係は最悪のものとなっていた。教授の専門はコムギ・オオムギの遺伝と育種であったが、私に対する仕事の指示は明確さを欠き、お互いに意に反する結果となることが重なっていった。私が自分の研究としてきたサトイモの栽培も禁止された。独自に採集してきた200ほどの系統も、やむなく京大に寄附した。教授の仕事も、明確な指示がなく、行きちがいになることが多かった。

ついに私は学生実験等の助手の担当の仕事だけは続けて、教授の手伝いは一切やめることにした。AACKの先輩が時報の原稿の件で来岡し、部屋で話している最中にわりこんできて、「君は何しに来ているのか？」と問いつめるような事さえあった。

もはや事態は絶望的であった。京大の先輩達の中には、「お前もひどい奴に当たってしまったなあ」という人もいた。そんな情況は、岡大に来ている京大の先輩から、京大の遺伝学研究室にもいつしか伝わったらしかった。

ある時、常脇恒一郎先生は私のことを心配して「京都に来てサトイモのDNAを調べなさい」と言ってきて下さった。DNAを扱う実験は実験用試薬や用具などは大変高価である上に、一定時間おきに連続して操作を行なうことが多い。一つの実験に数ヶ月かかることも多い。年に3万円ほどしかない研究経費や出張旅費など何の役にも立たない。助手の安月給では、何ヶ月も京都に通うことなどとうてい無理だ。しかし家内は、「とにかく必要なんだから、なんとかしましょうよ」と言ってくれた。

シュラーフで教室に泊まりこみ実験にとりかかった。シオノギ時代の同僚である小島隆雄君が守山に住んでいるので、車でそちらまで泊りに行くことも多かった。予想外なことにサトイモ属と近縁のクワズイモ属との間で葉緑体DNAの共通性が見つかったりして、確認のための実験をくり返すなどしたため、結局2年間にわたって京都に通うことになった。

その甲斐あって、インド国境で採集した特異な形態をもつ1系統を中心に、サトイモと近縁種であるクワズイモとの間にある類縁関係を明らかにできた。ふつうの大学院生ならまったくする必要のない苦労を重ねたが、この研究により京都大学農学博士の学位を取得することができた。常脇先生と京大の遺伝のスタッフ・先輩・学生たちの援助のおかげであった。また、借金をして京都行きを支えてくれた妻のこの間の苦労は計り知れないものがあったが、おかげで万年助手の地位から助教授に這い上がれた。これでやっと一人前の研究者となれたのであった。この世界では、助手は人間ではないのだ。

しかし残された日は短く、2006年3月に65才の停年退職を迎えた。膨大なサトイモ系統は、永年のサトイモ研究の同志である東京農大の小西政継教授の世話で、同大の宮古島農場で系統保存されることとなった。これで永年こつこつと収集してきたサトイモ達も、世界中の数少ない研究者にも公開された存在となれたわけで、私も研究者として一半の責任も果たせたわけである。私がサトイモという植物に関する人

類の知識に寄与できたことは微々たるものでしかなく、後継の研究者を育成することもできなかった。それでもなお、サトイモが植物の進化史と農耕の歴史の上に、一つの位置を占めていたことを発見できたことは本当にうれしいことであった。

また妻の死の数年前、共にネパールを訪れて、ポカラからのガネッシュを見せてあげ、ヤルン・カンも機上から見せることができた。妻には苦労ばかりかけてきたのに、たったこれ位しかお返しができなかった。

自分が多くのものを犠牲にしてつっ走ってきた見返りが、たったこの程度のものでしかなかったことを思うと、自分の一生があまりにも小さかったことを悔いるばかりである。

回想 50 年

木村　雅昭

私たちがアンナプルナ南峰（ガネッシュ）に出かけた 1964 年は、東京オリンピックの年である。所得倍増計画が実を結び、経済は活況を呈していたが、オリンピックには国際社会への日本の復帰の意味も込められていた。外貨規制が緩和され、500 ドルに限って持ち出しができるようになったのも、この同じ年である。そうしたなかで私たち学生は、7 月 25 日に神戸から船で発ち、香港で飛行機に乗り換えてカルカッタにつき、とあるホテルに投宿した。そこは長期滞在者が多かったが、年配の英国婦人が私の国籍を尋ね、「ああ、日本人が戻ってきたね」と言ったことを、今でも鮮明に覚えている。

当時のインドといえば独立して 17 年、国造りに邁進していたに違いないが、むしろ静かな緊張感を漂わせている社会の雰囲気が私の目を引いた。この時代のインドを評して「貧しさの中の清らかさ」と言ったのは、たしかインド系ノーベル賞作家ナイポールである。もとよりインドの貧困はすさまじく、カルカッタの路上を夥しい数の貧しい人々が、ボロをまとって歩いていた。こうした人の波に、はじめはギョッとしたが、しかし一切の虚飾を剥奪されているゆえに、かえって彼らに人間的尊厳を実感したのもこのときである。

カルカッタで船荷を待ち、通関を済ませて荷物と共に汽車で国境の町に向かい、ジープでゲートを越えればネパールの町バイラワである。そこからポカラまでの飛行機は、滑走路が舗装されていず、おまけにモンスーンがまだ明けていなかったから大幅に遅れ、おおいに気をもんだ。じつはこの空港が危ないという情報は、カルカッタで行きずりのロシア人から得ていたが、王立ネパール航空のオフィスが保証したものだからこのルートをとったわけである。このとき情報解読の初歩を身をもって体得したことになるが、それはともかく飛行機はやっと飛び、ポカラでカトマンズ経由の樋口隊長、島田ケロと再会し、これで全員が揃うこととなった。

私たちがガネッシュに出かける 2 年前には山岳部からインドラサンに遠征隊が派遣され、学士山岳会はといえば、チョゴリザ、ノシャック、サルトロと、遠征隊が目白押しであった。こうした経験に教えられて、準備にそれほど困難を感じなかったが、ライト・エクスペディションが私たちの方針であった。この意味で、荷物の総重量が 1.6 トンになったとき、大いに落胆した。それでも日頃の装備で間に合うものは、そのまま使用し、高所服も先輩から一部借用、新しく作るものもできるだけ安くという方針で臨んだ。その結果、汚れたヤッケなど、自分で洗濯してから持参、ピッケル、アイゼンは自己調達ということになったが、いざ、ベースキャンプで広げて見ると、私たちの装備より、シェルパの装備の方がはるかに高級であった。彼らはフランス隊やイギリス隊から、一流の装備を支給されていたのである。

目標とするガネッシュは、ベースキャンプから眺める限り、それほど苦労することなく登れるように見えた。しかしいざ取りかかって見ると、やはりヒマラヤは手ごわく、数々の困難に出くわした。なかでも頻発する雪崩には大いに悩まされた。それに秋とはいえ、ヒマラヤに照りつける陽射しは強いから、つい昨日のデブリ

もまたたく間に古びた相に変化してしまい、うんと前の雪崩のように見えてくる。おかげでデブリの上をのんびりと歩いているうちに大雪崩に襲われ、隊員の中にはあやうく命を落としかけた者もいた。氷壁にも数多く出くわし、持参したアイス・ハーケンの数が足りず、抜いてはまた使用するといったことを繰り返した。他のメンバーのことは知らないが、私自身、日本の山で氷壁を登ったこともなければ、アイス・ハーケンを使ったこともなかった。こんな未熟者がよくヒマラヤまで出かけたと言われればそれまでだが、日本でそれなりの修練を積んでおれば、必ずヒマラヤでも通用すると確信していたから、別に不安を感じることもなかった。2、3本打つうちに、音と手応えでハーケンのきき具合がわかるようになり、ロック・ハーケンと同じ感覚、要領で打っていったのである。

登頂全般に関しては上田ポッポのすばらしい登頂記（『ガネッシュの蒼い氷』朝日新聞社、所収）があるので、それに譲るが、アタックのことだけここに記しておこう。メンバーは吉野コッペ、上田、それに私の3名（島田は第4キャンプすぐ上の氷壁突破での奮闘が祟って体をこわしてしまった）、第5キャンプがアタック・キャンプである。キャンプのすぐ上の氷壁とそれに続く急傾斜の氷のトラバースは、前日にルート工作をしておいたから、それほど困難なくやり過ごせたが、そこからは未知の領域だ。堅雪の急斜面が続いている。幸い殆どはキック・ステップで登ることができた。が、でっかい氷壁が出てきたなら、作戦を立て直さなければならなかったから、氷壁や雪の突起を回り込んで前途に大きな障害がないことを確かめるたびに、ホッとした。とにかくトップを代わりつつ、遮二無二、雪面を登っていったが、最後に稜線へ出るところは、雪庇が覆い被さっていた。運良く今度のトップの番は天才的なクライマー、吉野である。エッセンを済ませ、急斜面を登り、おもむろに雪庇に取りついた彼は、しばらくカッティングをしていたが、やがてその姿は雪庇の彼方に消えた。

続く私にはどう登ってよいか分からない。結局、ザイルに強引に頼って稜線に出た。あとは稜線を歩くだけだ。しばらくして中央峰と名付けたピークに着いたが、まだ南に少し高いピークがある。そこまでの往復は2～3時間とふんだが、結局あきらめざるを得なかった。というのもこのときの時間は2時45分で、「ビバークはするな」と上尾副隊長に厳命されていたからである。雪庇の直下はビバークに最適だが、という思いが瞬時頭をよぎったが、振り払った。結局、最高峰の登頂は二日後、副隊長とシェルパによってなし遂げられた。また、ベースキャンプに戻ってから、島田と私は美しいヒマラヤ襞に覆われたテント・ピーク（5945 m）を目指し、首尾良く初登頂することができた。カトマンズに還った後、学生たちはヒマがあるので、二手に分かれて、二ヶ月間、ネパールを旅することとなったのである。

この後、山岳部、学士山岳会を問わず、大きな遠征は1973年のヤルンカンまでなかった。このヤルンカン遠征はもともと1965年に予定されていたが、そのサーダーとして、1962年のジャヌーのフランス隊で活躍したウオンディを確保するために、京都からの依頼でダージリンに飛び、テンジン・ノルゲー相手に交渉することとなった。彼は友好的でサーダーの問題はたちどころに片づいた。おまけに私をHimalayan Climbers Associationの名誉会員にしてくれ、ワッペンとスカーフを頂戴した（もっともワッペンをその後なくしてしまったから、会の名称は不確かである）。このときダージリンの博物館には、1953年のイギリスのエベレスト隊の装備と、1963年のアメリカのエベレスト西稜隊の装備が展示してあった。両隊の装備には大きな開きがあったが、私たちの遠征隊の寄せ集め装備がアメリカ隊のものに近かったのに率直な驚きを覚えた。

このときの経験で、私自身インドに興味をもち、大学院に進んでインド研究を行うことになった。再度ヒマラヤに挑戦するためにはインド研究がよいという打算が働いていたことも否めない。1970年から71年にかけてインドに長期滞在することになったが、そのときインドの新聞に、フランス隊が南面からガネッシュに登ったことが掲載されていた。この滞在中、ヤルンカン許可とりつけ交渉のため、京都からの要請を受けてカトマンズにでかけたが、いざ許可が来たときには既に大学で講義を受け持たされていて、どうしても動きがとれなかった。

ガネッシュの後、ヒマラヤに出かけたのは1971年で、パンジャーブ・ヒマラヤにある

5400メートルのなんの変哲もない山くらいである。酷暑のデリーでのデスク・ワークの気晴らしに英国人と出かけ、マナリの登山施設でピッケルとアイゼンを借りたが、そこの施設長は、なんとあのウオンディであった。その彼に近くに適当な山がないかと尋ねたところ、インドラサンを挙げたのにはなお驚いた。いや、それは我々の仲間が1962年に初登頂した大変難しい山だ、そんな山をトレッカーなどに薦めたらだめだと注意したら、自分は詳しく知らなかった、以後、この山は挙げないでおくとの答えが返ってきたが、トレッカーが大勢ヒマラヤに押し寄せている昨今、あるいはトレッカーに扮したクライマーが登ったかもわからない。

聞けば私たちがベースキャンプを張ったところにも、トレッカーのための簡易宿泊所が建設されているという。それに「雪の棲み家」という言葉そのまま、白く輝いていたヒマラヤも、地球温暖化による融雪ですっかり黒くなってしまった。かつて純白のヒマラヤ襞に覆われていたテント・ピークも、私たちが登った南面は、すっかり雪が消え、黒ずんだ岩肌が露出してしまっている。その写真を見て、50年という時の経過を実感した。

ガネッシュからヤルン・カンまで、わたしの二十代

上田　豊

1964年のアンナプルナ南峰（ガネッシュ）登山中にわたしは21才になり、1973年ヤルン・カン登山中は29才だった。どちらも、わたしの書いた登頂記が出ているので、今さら付け加えることはない。本誌のヤルン・カン初登頂40周年記念特集（文献1）では、ヤルン・カン後のわたしの40年をふり返った。

その40年の基点は、ちょうど50年前のガネッシュ遠征にあり、二十代を通した行動でその後の方向が定まった。ここでは、その間のことを、さかのぼってみたい。これで前作と合わせれば、順序は逆になるが、ガネッシュ後の、わたしの50年をふり返ることになる。

■氷河研究の武者修行

ガネッシュ登山後のトレッキングを終え、1965年1月末ボンベイ港を出て、フランスのMMラインで香港まで船旅をした。欧州留学帰りの日本人たち、アジアの様々な人々、昼の海、夜の海。人生で最も思索の密な日々だったような気がする。寄港地の一つサイゴンでは、ベトナム戦争が始まっており、道路には銃を構えた兵士が立っていたが、川辺にはアベックの姿も見られた。2月中旬、東京へ空路帰国。隊事務局の配慮で、留守中、東京オリンピックで開設されていた新幹線で帰洛した。半年かけた初めての海外行動は、若い心にずっしりと残った。

帰国後の最初の仕事は、のちに『ガネッシュの蒼い氷』（朝日新聞社，1966）として出版される遠征報告の本を出すことだった。本は現役4隊員が、梅棹忠夫先生の指導を受けながら書いていった（文献2）。ガネッシュで初めて氷河を体験し、樋口明生隊長の学術調査で氷河を研究する学問があることを知ったわたしは、その道をめざすため、北大の低温科学研究所へ修行に出ることにした。本作りの合間の雑談でそれを聞いた梅棹さんは、札幌に行くのなら、加納一郎さん（探検ジャーナリスト）と北大理学部の樋口敬二に会うようにと言われた。

加納さんの極地本は愛読していたが、樋口敬二という方をわたしは知らない。「ぼくは無口なので、お会いしても話すことがありません」と戸惑うわたしに、「ただ座っておれば、樋口はなんぼでもしゃべってくれる」と梅棹さんは言われた。札幌に向かったのは1966年、学部最終年を迎える春休みだった。

低温研では京大探検部OBの遠藤八十一さんがネパール調査から帰られたばかりで、連日のように先生方のお宅に夕食に招かれた。わたしも連れられて、いつもジンギスカン焼きをごちそうになった。その際よく話題に出たのが、ネパールからの帰途タイに居残って何かを企んでいるという、北大山岳部OBの渡辺興亜（通称：ダン吉）さんであった。

三高山岳部OBで京大学士山岳会（AACK）会員でもある樋口先生にお会いした際、こう言

われた。これから名大理学部へ移って氷河の研究を始める。氷河の無い日本で、雪の無い名古屋で氷河を研究することに地球科学としての意味がある。ダン吉も呼ぶから一緒に始めないか、と。低温研では、低温室での実験や道内数ヵ所にあった野外観測所での実習など、ずい分お世話になったのだが、迷ったあげく大学院は名大をめざすことにした。これは後に、ダン吉氏にグイグイ引っ張られてのフィールド観測生活へとつながっていく岐路となった。

北大修行最後の4月中旬、わたしは利尻岳東稜の単独行に向かった。この計画は山岳部の水曜会でケンケンガクガクの議論の末ようやく認められたこともあり、この山行には、ひときわ強い思いがこもっていた。東稜登攀にかかり、上部のとあるコブからのくだり、左足を下ろした瞬間、ハッとして右に飛んだ。ガバッと割れた雪庇が急峻な谷へドーッと転げ落ちていった。雪庇の根元に置いた足に重心がかかる直前で救われたのだ。登りつづけて完登したが、全てがここで終わっていたかもしれない分かれ目でもあった（文献3）。

■ブータン 1967-68

その年の名大大学院の受験は、海洋学を始めるという樋口研究室の競争率が突出した。不勉強者の結果は明白だった。せめて専攻の気象学の卒業研究は、しっかりやろうと思った。

卒業研究をまとめにかかろうという冬、当時鎖国状態のブータンの山を現役山岳部でやらないかという話が出た。AACKからで、言い出したのは今西錦司さん。難しい交渉が必須のブータンこそAACK向きのようだが、懸案だったヤルン・カン計画の実現に集中するためだったのか。

わたしはガネッシュ計画の際には後を追う形で参入し、ずうっと先輩の後を付いていった。だからいずれは、白紙の状態から自分で計画を立ち上げ実現したかった。ブータン計画はすでに言い出されていたから、白紙からではなかった。また、実現できそうな切っ掛けがあったわけでもない。それでもわたしは、ブータンをやってみることにした。卒論どころではない。

当初の計画は、ブータン最高峰・ガンケルプンツムの初登頂であった（文献4）。まずAACKの理事会だったか、今西さんや中尾佐助さんら大先輩の居並ぶ前で、山岳部の計画として説明した。同席した先輩たちによれば、計画は好評で、わたしが詰襟の学生服を着て出たのが効果的だったそうだ。資料収集・計画作成には、3回生の井上・北上田・原らと励んだ。こうして3月中旬、入国・登山許可申請書をブータン国王宛、英文版にチベット文版を付けて発送した。チベット文は今西さんの発案で、在日のラマ教高僧に依頼し、英文を翻訳してチベット文字で書いたものだ。隊長・小野寺幸之進教授ほか4名で、1967年秋の計画だった。

ピンチの卒論には、剛腕の救い手が現れた。防災研究所の光田寧・助教授で、後年、井上治郎が力を入れていた中国乾燥域での地空相互作用研究プロジェクトの代表者になった方だ。卒論発表の直前だったか、大学院生を招集し、図表の作成、原稿の複写・製本他テキパキと指示。ご自身は卒論の前書きの草稿を書かれ、本文の主要部分の作文と全体の清書は自分でしたと思うが、卒論発表の順番を最後に回す手配までしてくれた。

出る気のなかった卒業式の頃は、日高で遭難した高山晴彦君の捜索支援のため、ペテガリ岳へ向かっていた。4月からわたしの身分は名大理学部研究生となり、ブータン計画の推進と大学院の受験勉強に集中する。ブータンの話が起ってから、ブータンに少しでも関係した方々には、ほとんどお会いして情報を集めた。また何かにつけ先輩方に相談した。夜の定番は、まず木村雅昭さんの下宿を訪ねて助言を求め、次に谷泰さんを訪ねて判断をあおぐことだった。座り込んでジイーッと考え込むわたしを前に、貴重な時間をずい分と費やしていただいた。

ブータン側との手紙のやりとりで、やがて計画は縮小され、いったん内諾が得られた山域探査を主目的に、小野寺隊長・上田・市川光雄（3回生）で隊を編成。予算280万円で9月より企業からの募金を始めた。その後ブータンからは、観光だけなら可能との手紙につづいて、延期してほしいと伝えてきた。ブータンの外交権を握るインド政府からのインナーライン通過許可の取得も難題であり、11月末わたしは単身ニューデリーへ飛んだ。こうして、交渉のためのインド滞在を半年間つづけることになる。

この間、インド外務省、日本大使館などに通い、何かの手を打っては結果待ちという日々が

つづいた。ブータン側の意向とインド側の方針がからみって様々な紆余曲折があり、複雑な事態にどう対処すればいいのか、頭の痛い日がつづいた。大使館では水瀬昭典さん（AACK）と高校で同期だった松本紘一書記官にお世話になり、食事にもよく誘っていただいた。たまにブータン政府要人がニューデリーに出てこられた時は、チャンスであった。だが、この計画を通していえることは、数多くの方々にお会いして協力も得たが、ブータンのために貢献できるとか、王族を京都で接待したとか、何らかの決め手に欠けていたことが致命的であった。

乾季のデリー生活は快適だった。宿代節約のため、2ヵ月ほどYMCAの下宿タイプの部屋を借りた。2人部屋で、コンクリート張りの室内には粗末なベッドと机だけだったと思う。食事のおかずはいつもカレー汁だけで、わずかに何かが一片浮いていたような。そんな宿でも、同室者は首都の平均的なサラリーマン。はじめの男はインド風の身なりでヒンズー教徒だったか、無口で会話はほとんどなかった。2人目は西洋風で陽気なクリスチャンの設計技師。切手を収集しており、わたしに届く日本切手の糊の粘着力に感心していた。かれが口ずさんでいた500 Milesと Beautiful Brown Eyesの歌詞を教えてもらった。

1回目のブータン短期入国を果たし気持に余裕がでてくると、交渉で手を打った後の待機中に泊りがけの遠出をした。2月、砂漠を見たくなって地図でさがすと、タール砂漠にビーカーネルという街があった。月をながめながら夜汽車にゆられて行った。着いた半砂漠の街は意外に大きく、郊外には大理石の寺院があり、人々と共に参拝した。夕方まで歩き回り、夜行列車で帰った。3月、夜汽車に山岳鉄道を乗り継いで、シムラへ行った。高みに登り、5, 6千m級の雪の連峰を遠望した。4月、ナイニ・タールに行って峠に登り、ナンダデヴィを間近に見た。豪壮な山容だった。

地球科学や氷河の本で勉強もした。大学院入試には合格していた。チベット語の教科書も読んだが身につかなかった。読む本が無くなると、持っていた理科年表の通読を1頁から始めた。

1968年4月、わたしは名大の院生になったが、まだデリーに居た。2月には日本から、この年11月に出る南極越冬隊に参加しないかと手紙が届き、もとから切望していたので、もちろん承諾していた。ところが参加するなら4月中に帰国せよとの電報を受けた。それは無理で6月末までの帰国でダメならブータンを優先すると返事した。

快適だったデリーも、灼熱のプレ・モンスーン季になっていた。長かったインド滞在も終盤となり、交渉も最後の手を打った。その返事待ちの5月、市川とネパールへ行ってロールワリンの旅をした。ヒマラヤの氷雪は欲求不満をやわらげ、未知をのぞけた旅でもあった。帰国後のことだが、ネパール行のことも今西さんに報告すると、一事に徹して粘るべしとのお考えからか、不快感を示された。けれども、わたしたちは転進したのではない。わたしは氷河に触れて帰りたかったし、市川にしてみれば、初めてのヒマラヤ遠征でその氷雪を見ることもなく帰るなんて、かわいそうだ。

結局、ブータンへは1月下旬に1週間（小野寺・上田）、6月上旬に10日間（上田・市川）入国できたが、山奥へは入れなかった。ブータン・ヒマラヤが望める峠を通った際、いつも氷雪は雲に隠されていた。この隊では、見える成果は残らなかった。だから、京大のブータン関係史からは、忘れさられているようだ。ただ、その後のブータンでの京大の活動のうち、山岳部派遣の隊がつづくのは、わたしたちの隊が山岳部の計画であったことが関係しているだろう。また、隊としての成果が無くても、わたし個人にとっては、自分で、できるだけのことをやったという、格別で大切な思いが深く刻まれている。

6月のブータン訪問の際、献身的な農業指導で地元から尊敬を集めている西岡京治さんが、パロのお宅にわたしたちを招いてくださった。西岡さんは「本当にブータンのことを考えてくれる人が来てくれればありがたいなあ」と言われた。当時、未踏峰への意欲しかなかったわたしには、つらい言葉だった。その30年後、ブータンの氷河湖決壊洪水に関わる調査でブータン・ヒマラヤに入り、かつての夢を別の形で実現できた（文献5）。このときブータンをやってみようとしたのは、1967-68年の無念が長く残っていたからでもあろう。今も名大の藤田耕史（京大山岳部OB）らによって調査はつづいており、ブータンからの留学生も関係部署で活

躍している。これで少しは西岡さんに顔向けできるのではないだろうか。

■南極越冬 1968-1970

秘境といわれたブータンの、首都ティンプウをジープで出てから、東京の豪華な夜景を機上から見下ろしたのは、わずか3日後のこと、6月半ばだった。わたしの南極隊参加は健康診断を残して許されており、すでに第10次南極観測隊の準備は始まっていた。大学院は入学早々2年間の休学にして、隊の仕事に専念する。

南極隊員の担当は観測と設営に分かれているが、わたしは地学部門・雪氷学担当の観測隊員になった。しかしそれまで設営の調理隊員に任されていた食料の計画作成・調達を手伝うことになった。東京に駐在して準備を整え、砕氷船「ふじ」で南極に向かった。

1969年2月、わたしたちの待つ昭和基地に第9次隊の極点旅行隊が帰投した。一直線で目ざすゴールを往復した大旅行は、それまでの内陸旅行の集大成であるとともに、ひとつの時代の終りでもあった。10次隊からは、氷床研究に効果的な観測ルートを設定し、年次計画のもとでデータを蓄積していくという、内陸雪氷学の新しい観測時代が始まるおもしろさがあった(文献6)。

越冬中、7月にアポロが初の月面着陸を果たした。9月わたしは26才になった。11月になって、3ヵ月の内陸本調査に向かう。最大の作業は、氷床の流動速度を測量するため、不動点であるやまと山脈の露岩を目ざし、氷床上で250キロにわたって精密測量を繰り返し、三角測量網を設置することだった。40日かけて162個の三角形がつながれた。4年後にそれらの三角形の頂点に立てたポールの位置が再測され、流動速度が得られた。再測隊では横山宏太郎が活躍している。

やまと山脈では日程がつまっていたが、登山もできて、山登りを知っていることの幸せを感じた。この内陸旅行では、地図に記載されていないヌナタク（氷床上の孤立した岩峰）や知られていなかった雪原上のモレーン・フィールドなど、ささやかな発見があった。また、やまと山脈で9個の隕石を見つけた。最初の1個を発見し、隕石ではないかと考えたのは北大低温研の成瀬廉二氏。あとは、ナビゲーターとして先頭車に乗り、クレバスを警戒しながらルートを見つめていたわたしが見つけた。これが切っ掛けでその後、日本隊が見つけた隕石は約1万7千個、南極全体では4万個を越えることになろうとは、思いもよらなかった。

はじめての南極での13ヵ月は、島にある昭和基地から、日帰りを除いて延べ5ヵ月間は基地の外で行動した。海氷上や白瀬氷河側岸の旅行は、海氷の割れ目や陸氷のクレバス帯にルートを求めて走りまわり、スリリングでもあった。やまと山脈から白瀬氷河奥へのルートでは、雪上車ごとはまりそうなヒドン・クレバスに恐怖さえ感じた。海氷、氷山などの多彩な風景、白瀬氷河の壮絶な景観、氷河を歩く緊張と楽しさ。行動中の緊張感と終えた後の充実感が、登山と同じく水平な世界にもあった。これらのフィールドを通して、地球の科学というものを少し感じとれたような気がした。

帰国後、大学院に復学して2年、修士論文「東南極白瀬氷河流域の質量収支についての水圏科学的研究」を書いた。既刊の和文自著論文2篇、総説1篇があった。それらでそのまま修士論文に挿入して使える個所は、別刷から切り取って、所定の400字詰め原稿用紙の手書き文の間に貼り付けて原稿を仕上げ、提出した。これが教官会議では形式として認められず、納得がいかないまま、原稿用紙約100頁を全て手書きになるよう書き直した。卒論につづいてスンナリとはいかなかったが、内容には自信があった。

■ヒマラヤ氷河調査事始め

二十まえのわたしは、ヒマラヤの未踏峰と南極の未踏地にあこがれていた。幸いにも二十代なかば過ぎで、両方とも実現してしまった。南極観測では各国が大組織でしのぎをけずっていた。次の目標としては、まだほとんど手つかずのヒマラヤの氷河調査を、小さい組織でもっと自由にやってみたかった。まず手始めに考えたのは、ヒマラヤに一人で3年間滞在して調査することだった。

その頃、文部省の気候変化と水に関する特定研究のなかで、名大の渡辺興亜氏は京大防災研のAACK中島暢太郎・樋口明生両氏らと組んでヒマラヤの氷河の情報収集を始めていた。防災研の学生だった井上治郎・佐藤和秀（AACK）やわたしも加わり、やがて名大・京大合同氷河

研究会そして北大等を加えた比較氷河研究会へと展開していく（文献7）。

この間、日本山岳会エベレスト登山隊に参加した井上の学術調査を契機に「ネパール・ヒマラヤ気象･氷河長期観測計画（1972-1975）」「名大・京大合同ネパール・ヒマラヤ氷河長期研究計画（1972-73年度分）」「ネパール・ヒマラヤの氷河台帳作成計画（1972-1975）」などを立案して計画書を書いた。

そんな折、1972年の8月末だった。名大のわたしの研究室の電話が鳴り、ヤルン・カン計画を推進していた松田隆雄さんから、つづいて樋口明生さんからも電話があった。こうしてわたしは、二十代の最後の年をヤルン・カンに向けることになる（文献8）。

文献

1) ヤルン・カン後、わたしの四○年．本誌65・66合併号，2013年
2) 梅棹さんの作文指南～「ガネッシュの蒼い氷」誕生まで．本誌57号，2011年
3) 春の利尻岳単独行．京大山岳部「報告」14号，61-64，1967年
4)「遠征報告」1967年度京都大学山岳部ブータンヒマラヤ遠征隊、京大山岳部「報告」15号，9-46，1970年
5) ブータン氷河湖決壊洪水調査記．本誌14号，1999年
6) 南極雑感―南極観測隊と探検．AACK時報，No.7，61-65，1972年
7) ヒマラヤ氷河調査事始め．渡辺興亜・上田豊，「雪氷」63巻2号，147-157，2001年
8)「残照のヤルン・カン」中央公論社，1979，1991年

1964年京都大学山岳部ネパールヒマラヤ遠征隊　雑感

上尾　庄一郎

ガネッシュの蒼い氷

今年は1964年京都大学山岳部ネパールヒマラヤ遠征隊によるアンナプルナ南峰（ガネッシュ 7256 m）初登頂の50周年に当たるので、隊員であった私にもニュースレターへの原稿依頼があった。これを機会に久しぶりに山岳部現役隊員4名による『ガネッシュの蒼い氷』（吉野熙通、木村雅昭、上田　豊、島田喜代男　著　梅棹忠夫　監修　アサヒ　アドベンチャーシリーズ　1966年　朝日新聞社　発行　300円）を読んだ。私はこの本の制作発行時期には博士論文の作成と海外留学が重なり、全く関与していない。

再読して感心したのは、50年近く前に書かれたこの本が今なお新鮮で、20歳代前半の現役山岳部員のはつらつとした気分に満ち溢れていることであった。もし今この本が書店に並んでいたとして、それを購読した一般読者は文中に何箇所かある東京オリンッピックの文字に気がつかなければ、半世紀前に発行された本とは思はないのではとも感じた。

現役山岳部員4名を主体とする遠征隊がヒマラヤの7千米を超える山に初登頂し、そのあと2名ずつ2組に分かれてネパール山岳地帯を2カ月にわたりワンダリング（現在のトレッキングとは異なる）を行ったことは、樋口明生隊長が［あとがき］で書いておられるように当時では画期的なことであったが、その50年後の今日までにこれを凌駕する遠征隊の記録はないと思う。

さらに私にとって感慨深かったのは、4名の若者がその後社会人として成し遂げた業績を知っているからであった。3名は大学（京大、名大、岡山大）教授として輝かしい業績を残し、1名（島田）は国際ビジネスマンとして活躍した。

実は3年ほど前に『ガネッシュの蒼い氷』が手元にないことに気が付き、入手できないか思案していたら、［アマゾン］に2冊の在庫があるのを教えられ、早速その1冊を1200円で購入した。他の1冊は3000円以上していた。9月4日現在、［アマゾン］には7冊の在庫があり、1780円から5780円までの値段が付いている。発行部数が少なかったことが影響しているので

あろうか。なにか、この本をより多くの人たちに読んでもらうための方策はないものだろうかと思っている。

以下『ガネッシュの蒼い氷』やその他の報告書に書かれていないことで今なお私が記憶していることを記したい。

遠征隊への参加

私は1962年のサルトロカンリ遠征隊に参加後は学位取得のための研究に専念したため、現役山岳部員との付き合いは希薄であったし、当時進行中であったカンチェンジュンガ西峰（後のヤルンカン）計画とも距離を置いていた。ところが1962年11月北穂高岳で遭難した加納の遺体が翌年の5月に滝谷の岩場の雪面で見つかり、私はその搬出隊の責任者に指命された。搬出はまず遺体を岩壁の下までおろし、次いでA沢上を北穂高岳稜線まで引き上げ、次に雪渓上を下ろし横尾を経由して上高地まで運ぶという、極めて危険で困難な作業であったが、参加した山岳部員の一致団結した共同作業で無事やり遂げた。このときの現役京大山岳部員が統率された行動を行い、自分の現役時代に比較して格段に高い登攀能力を持つと知ったことが遠征隊参加を決心させた。

今西寿雄氏

遠征隊の準備は百万編交差点近くの京大構内北西隅にあったAACK事務所を借りて進められた。そこえ突然今西寿雄氏が予告も無く一人でおいでになり、居合わせた隊員を激励されるとともに、多額の現金を隊への寄付金として下さった。山岳部現役の隊員にとっては1952年AACKアンナプルナ遠征隊隊長、1954年マナスル初登頂者である同氏はヒマラヤ登山の大先輩で仰ぎ見る存在であったが、その人と初めてお会いして、直接激励され且つ多額の金銭的援助も頂き、ただただ感激するばかりであった。

アンナプルナ内院入り

遠征隊の隊員4名は大部分の荷物とともにインドのカルカッタ（現コルカタ）から客車でネパール国境の駅ナウタンワまで行き、国境を越えてネパールのバイラワ空港に到着したが、ここで10日ほどの飛行便待ちを強いられた。モンスーンの降雨で空港が使用できないからであった。日本を出る時には情報を得ていなかったと記憶するが、千葉岳連のグレーシャードームを目指す隊がポカラへ行くべくすでに空港で待機していた。彼らも我々と同じルートでアンナプルナ内院に入り登頂をめざしていた。千葉岳連隊の次に大部分の荷物とともにようやくポカラ空港に到着し、何日も待っていた樋口隊長、島田、サーダー　パサンプタールらとの挨拶もほどほどにして、私が先ずしたことは千葉岳連隊の出発の予定を聞くことだった。彼らは2日のちに出発するとのことであったので直ちに我々は次の日出発することにして大車輪でその準備にかかった。我々は何としても彼らに先行してアンナプルナ内院に到着したかったからである。隊員もシェルパもがむしゃらに働き次の日にはポカラ空港を出発できた。ただ一部の荷物とシェルパのカルマはいまだ到着せず、後を追って本隊に合流することになった。驚いたことにカルマはポカラ到着の後人夫を急がし、すぐに本隊に追い付いてしまった。彼が1973年のAACKヤルンカン遠征隊のサーダーを務めたカルマである。

途中、人夫との難しい賃金交渉や彼らを安全に通すためのフィックス工作などがあったが、我々は7年前のマチャプチャリ隊に次ぐ2番目の隊として憧れのアンナプルナ内院に入り、かつ自分達の好みの場所にベースキャンプを設定することが出来た。

このアンナプルナ内院は今ではネパールにおける最も人気のあるトレッキングの目的地であり、AACK会員にもここを訪れた方がたくさんおられる。

登攀ルートと手製縄梯子

登攀ルートの開拓は困難を極め、巨大なナダレや雪氷ブロックの落下から辛うじて逃れる危険にさらされながら、ようやくセラック尾根にルートを見つけた。ところが6200 mの第4キャンプ地点で高さ20 m以上あるオーバーハングした氷壁にぶち当たった。

私は左右のどこかにう回路が見つかるだろうと安易に判断して、最も若い島田と上田の2人にルート開拓を任せてしまった。彼らはう回路の偵察はすぐに諦め、真正面から氷壁に取り付き、1日半ほどのアクロバット登攀でこれを登り切りフィックスロープを懸けることに成功し

た。当時の道具はアイスハーケン、あぶみ、スノーバーなどしかなく、ハーネスは持っておらず腰縄を使っていたことを考慮すると、驚異的な仕事であった。2年前の先輩達による岩と氷壁のインドラサン登頂を意識していたのであろうか。

これより上部にキャンプを作るには縄梯子がないとフィックスロープを登るのは無理なのは明らかであったので、どの時点だったか記憶は定かでないが、私はベースキャンプにいたコックのラクパを無線に呼び出し、ベースキャンプの下で縄梯子の横木にする木材を採取し至急上部に送ってくれるよう依頼した。ラクパは元来有能なシェルパで英語にも堪能なので、直ちに状況を理解し適当な長さに揃えた横木を調達し上部キャンプに送ってくれた。これとフィックスロープとで即席の縄梯子を作成して氷壁に吊るし、ルートが確保出来た。ただ、宙にぶらさがっている縄梯子を登るのは大変困難で、ひたすら腕力に頼らなければならなかった。

こうして上部にキャンプが設営可能となり、アタック体制が出来たが、残念なことに前日の氷壁での重労働がたたり、島田は痔の発作で行動できなくなってしまった。私はかねがね頂上アタックは現役4人の2パーティーで同時に行う計画をしていたのだが、3人1パーティーに変更せざるを得なくなった。3人のパーティーでは登攀の能率は落ちるが、それを承知で決行した。頂上アタック隊の最終キャンプへの帰着が夜9時すぎになったのはそのためである。

サーダー　パサンプタール

パサンプタールは当時ネパールで最も著名なサーダーの1人であったので、通常ならば京大山岳部隊のような弱小隊のサーダーにはならないのであった。しかし当時中印紛争の激化によりインド政府がネパールに対しチベット(中国)とネパールの国境に近い山を目指す外国登山隊への登山許可を出さないように圧力をかけており、そのためネパールに来る外国登山隊が大幅に減少していたので、我が隊に来てくれた。彼はその年のプレモンスーン期に長野岳連のギャチュンカン隊のサーダーとして大いに活躍したので、同隊により日本に招待された。私はその時すでにサーダーに決まっていた彼と会ったが、彼は日本の各地に連れまわされ、カルチャーショックのためか消耗しているように見えた。長野岳連隊は財政的に豊かで、装備品は最新の欧州製品を使っていたらしく、彼は我が隊がシェルパ用に準備した、それに比べて貧弱な装備には、大いに不満であった。我々はシェルパに支給する個人装備が彼らの重要な収入源であることを理解していなかった。

キャラバンでの彼の運営力はさすがと思われた。氷雪の登攀が始まると、最初は若い隊員の能力を信頼していなかったようで、自ら先頭に立ちルート開拓に努めたが、そのうちこれなら大丈夫と思ったのか、もっぱらシェルパを統率して荷揚げに専念するようになった。

登攀の後半には彼の体調は十分ではなかったようであったが、その後サーダーとして活躍した記録を知らない。

登山のあと

登山が無事終了し、4名の現役隊員は2人ずつ2組に分かれてネパール山岳地帯の旅行に出発したあと、樋口隊長も私もすぐには日本に帰国せず各々旅行に出た。2年前のサルトロカンリ遠征隊が登頂成功後全員揃って帰国したことへの批判の声があったことを意識しての行動であった、隊長はインド各地の研究機関を訪問した。私は先ずニューデリーに行き、カンチェンジュンガ西峰遠征計画にネパール政府が許可を出すようインド政府と交渉するため滞在中の舟橋明賢氏と会い、その労をねぎらったのち空路アフガニスタンのカブールに入った。特に目的があったわけではなかったが、出来ればソ連(当時、現在ウズベキスタン）のタシケントに行ってみたいと思っていた。しかしカブールの日本大使館でソ連に入国するには予めドル貨を払い込まないとだめだと教えられ断念した。

当時のカブールはその後現在に至る混乱状態を予感させるものはなく、私は平気で市内や郊外を歩きまわった。次いで、カブールから国境のカイバル峠を越えてパキスタンのペシャワールに行く路線バスに唯一人の外国人客として乗車し、何事もなくペシャワールに到着した。ここは2年前にサルトロカンリ遠征隊の隊員として来たことがあった。もちろん現在このルートはタリバンなど反政府勢力が出没する地域であり、私がしたような1人旅はとうてい出来ないであろう。

その後路線バスでラホールに行きサルトロカンリ隊の隊員ハイヤット　カーンに会うつもりであったが、不在であった。ところが全く偶然に繁華街の書店でサルトロカンリに初登頂したバシールと再開した。もう1人の若手隊員であったペルベッツも近くに住んでいて、3人が2年ぶりに集まった。日本でならここで一杯やろうとなるところ回教国パキスタンなのでお茶とケーキで話し合ったが、話の内容は覚えていない。その後の彼らとは没交渉である。

ラホールから、当時同じ国であるので安価な国内便を使い、東パキスタン（現バングラデッシュ）のダッカに飛び、街を観光したのち出発地点のカルカッタに到着した。ここで久しぶりに樋口隊長と再会した。

二人はバンコックの京大東南アジア研究センターの出先を訪ねたのち香港で別れ、隊長は日本へ帰り、私は台北に行き懇意にしていた大学教授を訪ねたのち日本に帰着した。僅かのドル札と日本までの航空券を持つだけで、当時はもちろんクレジットカードも無く、外貨枠が厳しく自由に送金ができない時代であったのに、半世紀後の今から振り返ると、よくあんな気楽で怖いもの知らずな一人旅が出来たものだと思う。

現役隊員の帰国は年が改まってからであった。

ガネッシュ讃

斎藤　清明

ガネッシュ初登頂のときは一回生だった。隊の出発を、みんなで神戸港へ見送りに行った。フランスに向かうという客船。隊員は香港までの乗船で、そこからは空路と聞いたが、これがエクスペディションの旅立ちなのかと感動したものだった（私も5年後に貨物船に乗って南太平洋に出かけることになるのも、この見送りの印象があったから）。

埠頭では盛大な宴会になって、鏡割りした樽酒まで出た。ラインダンスなどしながら、しこたま飲ませてもらって酔っ払い、気がつくと、どこかの医務室で寝ていた。お世話になった女学生の方には、その後お会いしていないが、半世紀経っても恥ずかしい。

登頂から10年後に、初めてガネッシュの山容を目前にすることができた。そのとき、私も就職しており、ネパールへ新婚旅行に出かけたのだった。ちょうど上田ポッポさんも樋口敬二さんたちと氷河調査をしていて、カトマンズでお会いし、ごちそうになった。

この氷河調査を新聞記事にもしたのだが、「小氷河期が来るかも？」という内容。当時は寒冷化のほうが懸念されて、まだ地球温暖化が話題にもなっていなかった。調査隊はその後、調査を積み重ねて、ヒマラヤの氷河後退を明らかにする。

さて、新婚さんはポカラからトレッキング。ポーターをつれ、のんびりと。このとき眺めた山々のなかで、マチャプチャレとガネッシュが、ひときわ目立ったのです。ガネッシュの堂々とした姿に、よくぞ登ったものだと感心した。

さらに40年後の今年。再び新婚旅行のコースを歩きにいった。もちろん、往時にくらべて車道が奥地まで伸びていて（悪路だが）、ジョムソン（空路もある）や聖地ムクチナートまで手軽に行ける。それらを廻り、河口慧海が滞在したマルファも訪れた後、ガネッシュに対面した。やはり、惚れ惚れとする、立派な山であった。

今年は、私にとって京大山岳部に入ってからちょうど50年になる。西行の「年たけて又こゆべしと思いきや・・・」（新古今集）をよく唱えるのだが、「命なりけり」のガネッシュである。

ところで、久しぶりに訪れて、日本人に会わなかったのには驚いた。トレッキング道でも、ポカラの町中でも。よく聞こえてくるのは、韓国や中国の言葉ばかり。もう、日本人にはネパールは人気がないのだろうか。

アンナプルナ南峰について

編集人　横山宏太郎

ネパール中部、アンナプルナ主峰から南に延びる尾根上にある。アンナプルナ　サウス、アンナプルナ　ダクシン（南の意）、またガネッシュとも呼ばれる。ガネッシュは象の頭を持つヒンドゥー教の神で、ポカラ方面からのこの山の姿がガネッシュの頭部に似ているための呼称である。モディ・コーラ源頭にあるのでモディツェとも呼ばれる。

南北に延びる主稜線上に3つのピークがあり、主峰（最南峰）は7219 m、中央峰は7094 m、北峰は7126 m。

1964京大隊では、10月13日、中央峰に吉野･木村･上田が、15日、最高点の主峰に上尾･ミンマが初登頂した。

なお標高は時代により少しずつ異なる数字が示されている。京都大学山岳部の報告13号（1966年）では、主峰（最南峰）：7256 m、中央峰：7150 m、北峰：7200 mとされている。

本稿をまとめるにあたり、月原敏博さんから有用な情報をいただきました。ありがとうございました。

AACKホームページの中の「会員のページ」には、1964京大隊の「スライド選（102枚）」と「8mm映像（60分）」があります。ぜひご覧ください。それぞれのURLは以下の通りです。

http://www.aack.or.jp/kaiinnope-ji/2012MAYageta/sample.html

http://www.aack.or.jp/kaiinnope-ji/2012JUNEageta/Annapurna_S.mp4

第30回雲南懇話会（2014年8月16日開催）、その講演概要

安仁屋政武、前田栄三

今年は雲南懇話会設立10周年となります。このことを記念して、第30回雲南懇話会を『「アフリカ地域特集」の記念講演会』と位置付け、開催致しました。

2014年8月、東京市ヶ谷のJICA研究所国際会議場に約100名の参加を得て、盛況裡に終了しました。

以下、概要を紹介致します。

1.「アフリカの5千メートル峰に登る」
―氷河を抱く山々―

(1) キリマンジャロ山（5895m）、ケニア山（5199m）

筑波大学名誉教授、AACK　安仁屋政武

1995年9月、アフリカの最高峰キリマンジャロ（5895m）に5泊6日でマチャメ・ルートからバランコ小屋・バラフ小屋を経由して登るコースを紹介した。このルートは一般的なマラング・ルートと異なり、人が少なく氷河地形を含む景色はバラエティに富んだ素晴らしいコースである。2000年11月、ケニア山（5199 m）にナロモル・コースから行き、山を周回して氷河・氷河湖の写真撮影を行った。実際に登ったのは歩いて登れるレナナ峰（4985 m）である。U字谷、カール（圏谷）、モレイン、氷河湖（Tarnターン）など氷河地形の発達がいい。観察した氷河はかなり後退していた。

(2) ルウェンゾリ山（5109 m、Mt. Rwenzori）

AACK　栗本 俊和

2012年2月に女性2名を含む3人で登りに出かけた時の様子を写真で紹介した。ウガンダとコンゴの国境に位置し、ビクトリア湖からの多量の水蒸気のため雨が多く、めったにその姿を見ることができないため「幻の月の山」と称され、ナイル河源流の山とされる。アプローチに深いジャングルの湿地帯を通過し、氷河上の登攀と山頂付近の岩稜登りと相俟って冒険的要素とクライミングの両方を楽しめる山とのこと

であった。

2.「野生チンパンジーの世界」―マハレ山塊国立公園（タンザニア）の事例より―

京都大学野生動物研究センター―研究員
伊藤 詞子

東アフリカ西端に位置するマハレ山塊国立公園では、主に野生チンパンジーの研究が継続しておこなわれてきており、来年で50周年を迎える。チンパンジーの日常の暮らしぶりとともに、長期研究によって徐々に明らかになってきた、チンパンジーと彼らを取り巻く世界の短期的（e.g. 主食となる果実の利用の仕方と結実動態パターンの関係）、及び長期的な動態（e.g. 気候や植生の変化）について、紹介した。ケンブリッジ大学から出版される予定の本（演者は編著者の1人）の目次に沿って話を進めたが、若き研究者として、本が出版される喜びが伝わってきた。

3.「アフリカの自然と近年の環境変化」―ケニア山、キリマンジャロ、ナミブ砂漠―

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科准教授　水野 一晴

アフリカではキリマンジャロ、ケニア山、ルウェンゾリ山のみが氷河を有するが、近年の温暖化により氷河が縮小し、10年後にはアフリカの高山から氷河が消滅すると言われている。ケニア山では氷河の後退による植物進入を詳しく紹介した。キリマンジャロでは自ら小型機をチャーターして氷河の写真を撮り、氷河の後退を明らかにした。近年は降水量の多い年と少ない年がはっきりと分かれ、ナミブ砂漠では洪水減少が森林枯死をもたらしたり、長期間に亘る洪水が植物種に影響を及ぼすことを示した。環境変化の時間軸を1億年前、1万年前、1千年前、100年前、10年前、一日ととって様々な例を示したのは、興味を大いに引いた。

4.「アフリカ狩猟採集民ブッシュマンの昔と今」―半世紀の記録―

京都大学名誉教授、AACK　田中 二郎

1966年以来、半世紀にわたって観察・調査してきたカラハリ砂漠のブッシュマンの生活について紹介した。石器時代を彷彿とさせる生活は、ボツワナ政府主導により1979年から定住化、集住化の道を歩むことになり、1997年にはついに故郷の地を追われて新しい居留地へと移住を強いられ、一千人を超える大集落で生活は激変した、とのことである。この過程を珍しい貴重な記録となる写真で紹介した。

大型の野生動物、特にキリンを倒し解体しキリンの胃の内容物で手を洗うくだりは、慈愛に満ちたその語り口と共に、昔日のブッシュマンの誇り高く躍動する姿を実感するものとして、実に印象的であった。しかし、日々の糧は狩猟によるものではなく、主に女性たちが行なう植物の採集に依存しているとの事で、一般に我々が抱いているイメージとは違うことを強調した。幼児を含む家族で現地に住み込み調査したが、これにより男だけでは難しかった観察や情報の入手ができたと考えられる。十分な講演時間を提供出来ず、彼らから学んだことを現代社会に問いかけるところまで話が及ばなかったのは悔やまれる。

第31回雲南懇話会の予告

1. 日時；2014年12月20日（土）13時～17時30分、その後茶話会
2. 場所;JICA研究所･国際会議場(東京･市ヶ谷)
3. 内容（講師、演題など変更ある場合は、ご了承願います。）

①「雲南懇話会、10年の歩み」―懇話会の今、これから―（15分）　AACK　前田 栄三

②「ネパール、ポカラの国際山岳博物館と私のヒマラヤ登山」―JICAシニアボランティア活動とその後のネパール三昧―
日本山岳会海外委員、
東京都山岳連盟海外委員
竹花 晃

③「キルギス自転車旅行、GPSとNASAの3次元地形データ（SRTM）の活用」
―キルギス見聞録、SRTMの活用事例（梅里雪山巡礼路等の等高線図・高低図作成)―
サイクリスト、シルクロード雑学大学
（歴史探検隊）前田 種雄

④「ヒマラヤ・チベット高所住民の健康」
―低酸素適応と生活変化の相互作用―
京都大学東南アジア研究所連携准教授、
総合地球環境学研究所客員准教授、
AACK　奥宮 清人

⑤「タイ・ビルマ漆器と中国虫糞茶」

―ビルマウルシの生産とタイ北部のビルマウルシ林を調べる。中国南部の虫糞茶とは何か？―

京都大学名誉教授（森林科学専攻）
渡辺 弘之

会員動向

編集後記

今年は1964年京都大学山岳部ネパールヒマラヤ遠征隊のアンナプルナ南峰初登頂から50年になるので、それにちなむ原稿を募集したところ、5人の会員からご寄稿いただきました。当時のことも、その後のお話も、たいへん興味深い内容です。

上田豊さんには編集にご協力いただき、たいへんありがとうございました。

雲南懇話会の報告と次回案内を安仁屋さん・前田さんからいただきました。設立10周年を記念した、8月16日の『「アフリカ地域特集」の記念講演会』の報告です。次回は12月20日です。

70号に原稿をちょうだいした皆様、ありがとうございました。

山の紅葉がしだいに里へ下っています。妙高は外輪も上部から白くなってきました。

次号は正月明けが締め切り、ほどほどの雪を願いながら、原稿をお待ちしております。

横山宏太郎

次号原稿締め切り　2015年1月16日
原稿送り先：横山宏太郎
〒943-0832　上越市本町2-1-12-801
メールアドレス：peng-y@amy.hi-ho.ne.jp

発行日　2014年11月30日
発行者　京都大学学士山岳会　会長　松林公蔵
発行所　〒606-8501
京都市左京区吉田本町（総合研究２号館４階）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科　竹田晋也　気付
編集人　横山宏太郎
製　作　京都市北区小山西花池町1-8
㈱土倉事務所